Article / 論文

九州産業大学語学教育研究センター紀要
Language Education & Research Center Journal
© 2024 KSU Language Education & Research Center
LERC
lerc.kyusan-u.ac.jp

ショーン・オケイシー『司教のかがり火』
――カトリック教会による抑圧への批判――

河野　賢司 (KONO Kenji)

はじめに

1920 年代半ばに初演されたダブリン３部作で名声を確立したアイルランドの劇作家ショーン・オケイシー (Sean O'Casey, 1880-1964)は、次作『銀杯』(*The Silver Tassie*)がダブリンのアビー劇場から却下された後、英国に自発的亡命を果たし、以降はアイルランド農村部を舞台とする風刺色の強い喜劇を続けて発表する。『紫塵』(*Purple Dust*, 1943)、『コケコッ好男(コーダン)』(*Cock-A-Doodle Dandy*, 1949)、そして本作『司教[1]のかがり火』(*Bishop's Bonfire*,1955)である。カトリック教会から上演禁止の通告を受けた『ネッド神父の太鼓』(*The Drums of Father Ned*, 1959)にもこの系譜はつながり、田舎４部作と括ることもできよう。本稿ではこのうち『司教のかがり火』に焦点を当て、カトリック教会による抑圧的支配を批判する観点から、オケイシーのアイルランドへの姿勢を考察する。

『司教のかがり火』は 1955 年２月 28 日、ダブリンのゲイアティ劇場(Gaiety Theatre)で初演され、1961 年７月 26 日にロンドンのマーメイド劇場(Mermaid Theatre)でも上演されている[2]。アイルランドの架空の田舎町バリウーナ(Ballyoonagh[3])に、この町出身

---

[1] アイルランド島は４つの大司教区(archdioceses)――アーマー(Armagh)、ダブリン(Dublin)、キャシェルとエムリー(Cashel & Emly)、トゥーアム(Tuam)――からなり、26 の司教区(dioceses)に細分化されている。Interactive map of the 26 dioceses on the island of Ireland | Irish Catholic Bishops' Conference （2024 年 1 1 月 29 日アクセス）を参照。したがって、「司教」の権威は、世俗的に言えば、州知事クラスのエリートに相当すると考えればよいだろう。オケイシーは『門扉の中で』(*Within the Gates*, 1934)において、神学生時代に過ちを犯して隠し子をもうけたギルバート司教が、自己保身と隠し子ジャニスの救済に苦悩する姿を赤裸々に描き、アメリカ公演は禁止された。

[2] 酷評する評論家もいたが、観客には受けて大入り満員だったと、1961 年８月 26 日付の書簡でオケイシーは述べている。David Krause (ed.), *The Letters of Sean O'Casey 1959-64, Vol. IV* (Washington, D.C.: The Catholic University of American Press, 1992), pp. 242-243.

[3] 「仔羊町」を意味するアイルランド語とする注釈 https://babynamesofireland.com/oonagh/（2024 年 1 月 29 日アクセス）と、「不思議な町」（Wondertown）とする John Jordan の解釈――Ronald Ayling (ed.), *Sean O'Casey: Modern Judgements* (Nashville: Aurora Publishers Inc., 1970), p.157.――、さらには「沼沢町」とする解釈――C. Desmond Greaves, *Sean O'Casey: Politics and Art* (London: Lawrence and Wishart, 1979), pp.195-196.――など、諸説ある。

Cite as: 河野　賢司 (2024).「ショーン・オケイシー『司教のかがり火』」 *Language Education and Research Center Journal, 19,* 139-153.

の司祭ビル・マラーキー(Bill Mullarkey[4])が司教に叙せられ、初めて帰郷することになる。地元の律修司祭バレン(Timothy Canon Burren)と有力者[5]の町議マイケル・ライリガン(Michael Reiligan[6])は、司教の里帰りを祝賀・歓迎するための「かがり火」や宿泊先となるライリガンの自宅の改装などの準備におおわらわで取りかかるが、作業員たちの不和や怠慢、失態で作業工程は滞りがちになる。そのうえ、ライリガンの娘２人（フーローンとキーリン）はそれぞれ恋愛の問題を抱えていることが露わになり、やがて破滅的な結末を迎える。

1. カトリック教会による抑圧

(1) 聖職が引き裂く自由恋愛

オケイシーが一貫して批判の矛先を向けたのは、キリスト教、とりわけカトリック教の抑圧的な支配である。『司教のかがり火』でその先鋒を担うのは、神学校に入学しながら挫折したメイナス・モウンロウ(Manus[7] Moanroe)である。彼は、ライリガンの長女フーローン(Foorawn[8])と恋仲であったが、おそらく彼女の父親やバレン司祭から反対されて[9]、神学校に進み、フーローンも修道女の道を志したと思われる。しかし、メイナスは恋情を断ち切ることができなかった。だからこそ、彼は町議の家に出入りして会計経理を引き受け、フーローンの翻意を促す機会を窺っていた。第１幕終盤の２人のやりとりを見てみよう。

フーローン　私に近寄らないで！　私はあなたが聖職に進むお手伝いをしたいと祈ったわ。なのに、私が祈っている間に、あなたはある早朝のゆっくりと過ぎる寒い時間に、自分の抱負をこっそり諦めて、大学の神聖な登録簿の自分の名前に「死去」と書き込んで、それから、それから、逃げ出して英国空軍の一員になった。

メイナス　手に入るあらゆる機会に、過去の一切の出来事から逃れて死ねるようにと、僕は死に向かって飛び立った。ところが、神さまは笑って、僕に勲章を贈った。そして別の機会に、いっそう死に近づいた時、神さまはまたもや笑って、銀の線章を追加して授章を充実させた。

---

4 同じ発音の普通名詞 ‘mallarkey’には「ばかげた[でたらめな、調子のいい]話」「ほら」の意味があり、オケイシーの揶揄を強く感じる。「低い身分の出自を強調する以外に、特別な意味合いは考えにくい」という指摘(C. Desmond Greaves, p.195.)は的を射ていないように思われる。

5 登場時のト書きにはよれば、「彼はこの地方最大の金満家で、聖職者たちの忠実な礎（いしずえ）であり、国事に多大な権力と影響力を有し――ライリガン町議の支援がなければ、アイルランド議会下院の地元選出議員は決して議席につくことはかなわないだろう」(8)とされる。「町長」でも「町議会議長」でもないが、強い権勢を持っている。

6 アイルランド語 ‘reilig’は「墓地」を意味する。教会に隣接する比喩ともとれる。

7 ラテン語「マグナス」(Magnus)のアイルランド語表記で、「偉大な」の意味。

8 アイルランド語で「冷たい」「寒い」を意味する。実際には、たぎる情熱を内面に秘めた女性である。

9 バレン司祭が登場して最初の台詞は、「メイナス・モウンロウはこの家に置いておく人物ではありませんぞ、町議。前にもそう申し上げた。かつて彼が神学生になる前、そしてお宅のフーローンが修道院に入る前に、娘さんに目を付けていたことを忘れてはなりません。聖職を棒に振り、英国空軍に入隊してからというもの、彼がろくでなしになったことはご存知でしょう」(8)であり、バレン司祭がメイナスのフーローンへの恋心を快く思っていなかったことを印象づけている。

Foorawn. Go away from me! I prayed to help you on your way to the priesthood; and while I was praying, you were creeping from your intention during the slow, cold hours of an early morning, leaving your name marked down as dead in the sacred register of the College; an' then, an' then you ran off to become one of the English air force.

Manus. Where I flew towards death at every chance I got so that I might die from all that had happened; but God laughed, and presented me with a medal; and when in another chance, I pushed closer to death, He laughed again, and added a silver bar to ripen the ribbon. (45-46) [10]

聖職を放棄したメイナスは自暴自棄になり、英雄的な死を求めて英国空軍に入隊するが、2度も死線をさまよいながらも、死を恐れぬ豪胆さゆえだろうか、皮肉なことに武勲を上げてしまったと、経緯を自嘲気味に語り、懸命にフーローンの心に愛のほむらを掻き立てようとする。「私はもう神さまのもので、神さまにしか仕えることができない」(I belong to God now, and Him only can I serve. [46])と拒絶するフーローンをメイナスは以下のように挑発する。

メイナス（辛辣に）それは高慢と恐怖が言わせている。神さまは君なしではやっていけない、君の姿が見つからないと神さまは途方に暮れる、そんなことを君は考えている。だったら、金を荒稼ぎに外国伝道にさっさと行って、太陽のど真ん中にいる黒檀の肌をしたアフリカ人や、北極の経帷子のような雪のなか、氷の家で暮らすエスキモー[11]に、ずる賢い嵐のような害悪をもたらせばいい。

フーローン（窓辺で立ち止まって――驚いて）何のお金の話をしているの？

メイナス　教会のご立派な貪欲のため、奉納の灯りのもと、事務机の引き出しに積み上げられている札束のことさ。

Manus [*bitterly*]. That's pride and fear speaking. You think God couldn't do without you; at a loss when He can't find you. Go on, then, heaping up pound after pound for foreign missions that bring a sly storm of harm to the ebonised African in the sun's centre, and the icy-homed Eskimo in the shroud snows of the north.

Foorawn [*halting at the window – surprised*]. What pounds are you talking about?

Manus. The notes heaped up for the good greed of the church in the bureau-drawer under the votive light. (46)

---

[10] テキストは Sean O'Casey, *The Complete Plays of Sean O'Casey, Volume Five*. (London: Macmillan, 1984)を使用し、引用文末尾に頁数を付す。

[11] 現代では「イヌイット」(Inuit)の呼称が一般化している。「イヌイット」は「人間」を意味し、アイヌ語の「アイヌ」(Ainu)、ジョージア（旧グルジア）語の「アダミアニ」(adamiani)も然りである。日蘭合作映画『アダミアニ　祈りの谷』(2021)ではジョージア共和国のパンキシ渓谷のチェチェンの人々が描かれている。

メイナスは、カトリック教会が世界的な布教活動を通して、黒人や少数民族を搾取していると訴える。搾取の実態に関する客観的な証拠も提示せず、メイナスはただただフーローンの決意を変えられない個人的な腹立ちからカトリック教会を批判しているようにも思えるだろう。フーローンが修道院生活を決意したのが彼女の自発的な意思に基づく純粋な信仰心に由来するものであれば、彼女を世俗に引き戻そうとするメイナスの企ては我儘で理不尽なものだろう。

(2) 聖職へ誘導する働きかけ

だが、実際にはそうでなかったことをボウヘロウ神父（Father Boheroe）は見抜いていた。

フーローン（腹を立てるが、心を動かされて）おかしな物言いですわ、神父さま、まるで私が誓いをかなぐり捨てて、メイナス・モウンロウの腕の中にこの身を隠したことがあるかのような口ぶりですわ！
ボウヘロウ神父　あなたは誓いをかなぐり捨ててはいません。怖くてそれができないのでしょう。でも今、あなたはやっぱり、彼の腕の中にいます。
フーローン（激しく）いません！　モンスィニョールさまが、まだ司祭だった時、何度も何度も私をほめてくださいましたし、それこそ、ここへお見えになる司教さまも私をほめてくださったことがあります。
ボウヘロウ神父　世俗的で野心家の男２人の誉め言葉が耳に聞こえるようです。困った話です！　彼の田園詩を読みさえすれば、司教のローブを背にまとい、司教の指輪をはめ、司教のミトラを頭に載せているビル・マラーキーは、やっぱりビル・マラーキーのままだと分かるはずです。（間。）彼に頼んで、あなたの愚かな誓いを取り消して貰いなさい、フーローン。勇気を持って。
フーローン（ショックを受けて）ああ、ボウヘロウ神父！　そんなこと、仰らないで。司教さまが絶対に私の誓いを取り消すことに同意されないのは、ご存じでしょう。司教さまにお願いする勇気はありません。
ボウヘロウ神父　ならば、神さまにお願いしなさい、わが娘。
フーローン　神さまにお願い？　私が誓いを破ることで神さまがお怒りにならないと、いったいどうして分かるのでしょうか？
ボウヘロウ神父　あなたが誓いを立てた時、神さまがお喜びだったと、どうして分かりました？
フーローン　司祭さまがそう仰り、司教さまもそう仰いました。
ボウヘロウ神父　ああ、そう、司教と司祭。忘れていました。このご両人は、神さまの言葉が何でも聞こえるのですね。
フーローン（落ち着かない憤りで）あなたって何ていう司祭なんです、そんなことを言うなんて！　若い娘の頭を混乱させて、神さまから顔を背けさせ、現世を、肉欲を、悪魔を振り返らせるなんて。
ボウヘロウ神父　ああ、フーローン、そうしたものを振り返るのは簡単ですが、立ち向かうのは、もっと善きことで、もっと勇敢なのです。私は決して、美しい現世を振り返ることも、活力や知性、健康に輝く人間の美しい肉体を振り返ることもしません。そして悪魔に関しては、よく私たちが悪魔呼ばわりするものは、真実を語る勇気をようやく奮い起こした真実にすぎません。

Foorawn [*resentful, but moved*]. You talk curious Father; talk as if I had thrown me vow away, and had hidden meself in Manus Moanroe's arms!

Father Boheroe.　You haven't thrown your vow away; you would be afraid to do it; but you are in his arms, all the same.

Foorawn [*vehemently*].　I am not!　The Monsignor, when he was Canon, has praised me often an' often; an' the very Bishop comin' here has praised me once.

Father Boheroe.　I can hear the two worldly and ambitious men speaking.　God help us!　You've only to see that Bill Mullarkey with a bishop's robe on his back, a bishop's ring on his finger, and a bishop's mitre on his head, is Bill Mullarkey still. [*A pause.*] Ask him to release you from foolish vows, Foorawn.　Be brave.

Foorawn [*shocked*].　Oh, Father Boheroe!　Don't say such things.　You know the Bishop would never consent to release me from my vow.　I daren't ask him.

Father Boheror.　Then ask God, my daughter.

Foorawn.　Ask God?　How could I ever possibly know that God wouldn't be angry with me for breaking my vow?

Father Boheroe.　How did you know that God was pleased when you took it?

Foorawn.　The Canon told me, the Bishop told me.

Father Boheroe.　Oh, yes, the Bishop and the Canon.　I forgot them.　They hear everything that God says.

Foorawn [*with uneasy indignation*].　What kind of a priest are you, sayin' such things! Muddlin' a young girl's mind against turnin' her face to God, an' turnin' her back on the world, the flesh, an' the devil.

Father Boheroe.　Ah, Foorawn, it is easy to turn one's back on things, but it is better and braver to face them.　I shall never turn my back on a beautiful world, nor on the beautiful flesh of humanity asparkle with vigour, intelligence, and health; and as for the devil, what we often declare to be the devil is but truth who has at last mustered the courage to speak it. (115-116)

フーローンが修道女の道を志した背景には、司祭と司教の強い慫慂があり、聖職者たちから賞賛されたことが大きな動機や励みになったことが、彼女の主体性を欠く返答から分かる。そして、司教が承諾しないから誓願撤回を申し出る勇気がない旨の台詞は、万一可能であれば、撤回したいという心の揺らぎを示している。修道院に入ることは家族を含む世間とのつながりを断つことを意味し、相当の熟慮と覚悟を必要とするし、それを勧める聖職者の側にも慎重さが求められるだろう。司教や司祭がフーローンに慫慂した根拠がどのようなものだったかは知る由もないが、地元名士ライリガンとカトリック教会との関係を濃密にする隠れた意図があったかもしれない。

(3) 結婚の自由への干渉

なぜならば、バレン司祭はさらには次女キーリン(Keelin[12])に対して政略結婚を画策していたことが判明するからである。

司祭（愛想よく）ついさっき、司教さまの弟、農夫（ファーマー）のマラーキーと話をしていました。善人で、若くて元気な若者です。
キーリン　若者ってことはないです。だって、ゆうに 50 過ぎですから、神父さま。
司祭（苛ついて）近頃では 50 を過ぎても年寄りとは見なされません。彼はあなたのことを尋ねていましたよ、キーリン。（間。）屈強な農夫で、身を固めたがっている、つまり結婚したがっています。彼はあなたが気に入っており、女性は亭主を選ぶのに、程よいところで手を打つのがよろしかろう。
キーリン（司祭に顔を向けて）あの人は私のことなどこれっぽっちも気にかけていません！あの人は父さんに借金があって、あの人と父さんは財産を共有したがっているんです。
司祭（きっぱりと）しかも、それは非常に賢明な方策です。検討すべきです。200 エーカーの肥沃な土地、30 頭の立派な牛や豚や鶏、実り豊かな小麦に大麦、ほぼ新築の広々とした納屋、さらに多くの動物のための緑の牧草地。婚姻の聖なる秘跡であなたと結ばれれば、わが娘よ、伯爵の娘婿にして司教の弟たる者は、伯爵その人に次ぐ権力者となり、伯爵が逝かれた時には、私たちみないつかは逝かねばならない訳で、あなたと彼がバリウーナの日常生活を率いることになるでしょう。

Canon [*graciously*]. I was just talking to the Bishop's brother, Farmer Mullarkey: a good man, young and active lad.

Keelin. Hardly a lad; why, he's well over fifty, Father.

Canon [*testily*]. That's not considered old these days. He was asking about you, Keelin. (*A pause.*) A strong farmer, and anxious to settle down: to marry. He likes you, my daughter, and a girl could go further and fare worse for a husband.

Keelin [*facing the Canon*]. He doesn't care a damn about me! He's in debt to me Da, and him an' me Da want to join their property.

Canon [*with decision*]. And a very sensible thing to do, child. You should think about it. Two hundred acres of good land, thirty head of fine cattle, pigs, and poultry; fine crops of wheat, and barley, a commodious barn, nearly new, and green pastures for many more animals. Joined to you in the holy Sacrament of Matrimony, my daughter, the son-in-law of the Count and the brother of the Bishop would be next in power to the Count himself; and, when the Count goes, as we all must go one day, you and he would lead the day-to-day life of Ballyoonagh. (90)

25 歳のキーリンに 50 歳過ぎの男との縁談を持ち込むバレン司祭は、マラーキー司教の実弟の世話を焼くことで司教からの厚遇を期待したのだろうか、あるいはライリガン町議が肥沃な土地や家畜を共同財産として得ることで、ますますライリガンからの献金が入ると目論んだのだろうか。少なくとも、若い恋人ダニエル(Daniel Clooncoohy)

[12] アイルランド語で「美しく、ほっそりしている」を意味する名前。

との結婚を望むキーリンの意志などはみじんも考慮に入れていない。カトリック教会によるこうした身近な圧力を肌で感じてきたメイナスにとって、教会は個人の自由を抑圧し、人々の意志を無視して、ひたすら経済的肥大化に突き進む組織に思えたことだろう。カトリック教会への献金はいわば合法的搾取制度を容認し、献金の略奪はむしろ搾取を是正すると妄想したメイナスは、深夜にライリガン邸に忍び込んで教会献金を窃盗する。

(4) 4つの詐欺行為とその根源

その犯行現場をフーローンに見つかる場面を見てみよう。

フーローン（前と同じように冷淡に）そこで何をしているの、モウンロウ？
メイナス　畜生、分からないのか、フーローン、ライリガンの娘さん？　大勢から盗んだ大金から、ほんの少し俺様が盗んでいるのさ。
フーローン　盗んだお金じゃない。真っ当に果たした仕事に支払われた報酬から、貯えたお金です。
メイナス（浮かれて）仕事の報酬！　神聖さの見せかけを繕った報酬、ってことか、詐欺の正面前に繕った報酬！
フーローン（今や腹を立てて）詐欺！　詐欺って何、永遠なる教会から放り捨てられて、喘いでいるくせして！　詐欺って何、錆(さび)ついた酔っ払い！　何の詐欺よ！
メイナス（穏やかに、かつ、きっぱりと）ダンス・ホールでの酒を禁止する聖職者たちの詐欺だよ、ここバリウーナでは、ライリガンの居酒屋で飲んだ連中がダンス・ホールに行き、ライリガンのダンス・ホールで踊った連中がライリガンの居酒屋に行って酒を飲んでいる。お次は、ライリガンの商店の詐欺だ。町の店舗には、心意気でも方法でもいいから、人生は肉だけじゃない、身体は衣服だけじゃないってことを示すものがまったくない。さらに、ライリガンの貧相な牧草地の詐欺だ。こぶだらけの牛たちが、草が足りないと神さまにモーモー悲しく啼(な)いている。ライリガンのシャツ工場の詐欺もある。女工たちは働いても土地を離れる費用を稼ぐのがやっとで、機械の操作係の胸の中よりも、機械の心臓部の方に、もっとメロディが流れている。

Foorawn [*as coldly as before*]. What are doin' there, Moanroe?

Manus. Damn it, can't you see, Foorawn, daughter of Reiligan?　I'm stealing a little from a lot stolen from many.

Foorawn. It wasn't stolen; it is money saved from the reward given for honest work done.

Manus [*hilariously*]. For work done!　For setting up an appearance of sanctity, you mean, before a front of fraud!

Foorawn [*angry now*]. Fraud!　What fraud, you gaspin' throw-away from the Church eternal!　What fraud, you rusty drunkard!　What fraud?

Manus [*quietly and firmly*] The fraud of clericals forbidding drink in the dance halls, though here, in Ballyoonagh, drinkers from Reiligan's tavern go to the dance hall to dance, and dancers from Reiligan's dance hall go to Reilign's tavern to drink; the fraud of Reiligan's town stores where there's nothing in spirit or manner to show that life's more than meat, and the body than rainment; the fraud of his mean meadows where his bunchy cattle low their woe to God for want of grass; the

fraud of his shirt factory where girls work but to earn enough to leave the land and where there's more melody in the heart of a machine than in the heart of its minder. (121)

メイナスが窃盗の口実として列挙する詐欺行為は、やや言葉足らずの感があり、敷衍しつつ詳しく検討してみよう。詐欺は４つ指摘され、①ダンス・ホールでの飲酒を禁じながら、その前後の飲酒行為は黙認あるいは奨励されていること、②ライリガン商店では食肉と衣料ばかりが販売され、文化・教養品目（書籍や雑誌、画集、音楽レコード等）に欠けるらしいこと、③放牧地における飼料牧草の窮乏は、家畜虐待レベルであること、④縫製工場の女工たちが低賃金労働と劣悪な労働環境に置かれていること、である。

① のダンス・ホールや居酒屋の営業に関し、従来、カトリック教会は風紀を維持するために否定的な姿勢を示してきた[13]が、町の有力者ライリガンが運営し、その収益から多額の献金が期待できることから、司祭は積極的な規制に乗り出していないようだ。スリーホーン爺さん(Codger Sleehaun)が見抜くように、「教会と国家がグルになりつつある」(The Church an' State's getting' together. [41])状況が生まれている。ライリガン自身は「この町にささやかな文化をもたらそうとしても何の役に立つ？」(What's the use of tryin' to bring a little culture into the town? [100])と嘆き、町の文化振興に尽力したかのような口ぶりだが、彼が行ったのは自宅の庭のレンガ塀建設、絨毯や高級家具、ピアノの購入が中心であり、司教滞在後はいずれも彼の私有財産として所有され、町民たちの公共財となる見込みは低い。つまり、②に挙げるように、ライリガン商店は住民の衣食を賄い、胃袋や外見を満足させる基本的役割は果たすものの、住民の心の糧となる物資、例えば書籍や絵画は提供していないことが想像できる。それどころか、この機会に乗じて書籍や絵画を焼き払うことを彼は画策している。

プロディカル　ライリガンは大勢の連中に大汗を流させて、ご来訪の司教を歓迎する火を点そうとして、でかいかがり火を拵えさせていて、かがり火のてっぺんには、有害な書物や邪悪な絵画の山を乗せて、焼き払うことになっている。
ランキン（怒りでどもって）投げ捨てろ、全部残らず――有害な絵画に有害な書物――全部、燃えるかがり火に放り捨てろ！

Prodical. Ay, an' Reiligan has a gang sweatin' millstreams buildin' a great bonfire to light a welcome to the comin' Bishop, an' piles of bad books an' evil pictures on top of it are to go away in flames.
Rankin [*stuttering with rage*]. Pitch them in, all in－bad pictures, bad books — pitch them into the burnin' bonfire! (33)

---

[13] ケン・ロウチ監督映画『ジミー、野を駆ける伝説』(*Jimmy's Hall*, 2014)では、アイルランド西部リートリム州の地元でホール再建を目指すジミー・グラルトンとシェリダン神父たちの対立が描かれ、1932 年の設定である。

焼き払われる対象は飽くまでも「有害な」書籍や絵画であるが、「有害」の判断基準がカトリック教会ならびに教会と癒着した政府に委ねられている点が問題である。1930 年 5 月、アイルランド自由国政府は「禁書リスト」13 冊を発表し、その中には文学的芸術的価値が高いと評価される作品も少なくなかった。例えば、オルダス・ハクスレー(Aldous Huxley, 1894-1963)の『恋愛対位法』(*Point Counter Point*, 1928)、ラドクリフ・ホール(Radclyffe Hall, 1886-1943)の『さびしさの泉』[14](*The Well of Loneliness*, 1928)が挙げられる。禁書リストは政府官報に掲載され、有力紙『アイリッシュ・タイムズ』でも大きく取り上げられる。

「司教のかがり火」にくべられる書籍のタイトルは具体的に言及されていないし、この田舎町にそもそも書籍が普及しているとも思えないが、本を焼く行為はそれを書いた作家の思想や意見をこの世から抹殺する行為[15]であり、宗教関連の祝賀行事に名を借りて、焚きつけに利用するのは言論や思想の巧妙な弾圧につながる。

メイナスが指摘する詐欺③は、牧草地の無責任な放置を問題視する。牧草地の衰退と飼育牛の窮状は、スリーホーン爺さんの口から詳しく語られる。

爺さん（うんざりして）干し草？　疲れた牛たちには噛めない屑だよ。どこの草地にも、クローバーやカラスノエンドウですら、生える兆しがない。50 年にもわたって犂が掘り起こす割れ目を味わってこなかった草地だからな。(中略) カミツレモドキにギシギシの寄せ集めに、小川の土手から忍び込むイグサの草地。4 分の 1 も伸びないうちに生育に疲れた芝草。あいつは自分の牛を牛と呼んでおる！　最高の牛たちでも、年に数百ガロン[16]の乳を飛ばし出す重労働で、寄り目になっておる。当然出すものと勘違いしておるのを誰もが分かっている量じゃ。通りかかる者はみな、牛たちの口元に浮かぶ苦悶の様子を見ずに済むように、そっぽを向き、牛たちは夜が明けてまた一日が始まると、神さまに無言の不平をもらしておるんじゃ。

Codger [*wearily*]. Hay?　Dust that the weary cattle can't chew.　There isn't a sign in any meadow even of clover or of verch.　Meadows that haven't felt the rousin' rift of a plough for fifty years. .... Meadows a medley of mayweed an' of dock, with rushes creepin' in from the brook's bank.　Grass that's tired of life before it's quarter grown.　He calls his cattle cattle!　The best of them cross-eyed with the strain of spillin' out a few hundred gallons a year; spillin' out what all know is an illusion of what it ought to be; with every passer-by turnin' his head aside so's not to see the tormented look on their gobs an' they complainin' silently to God against the dawn's lift-up of another day. (40-41)

十分な飼料を与えず搾乳を繰り返す行為は、動物虐待であり、半世紀にわたって耕作を放棄した不作為は、土地や植物へのネグレクトであろう。耕作を依頼する人手の不足、あるいは耕作労賃の出し惜しみが背景にあるにしても、動植物に対する苛烈な

---

[14] イタリア映画『丘の上の本屋さん』(*Il Diritto alla Felicitá*, 2021; 原題は『幸福の権利』)では、書店主リベロはこの本を探索していた神父に非売展示品を無料で貸与する。性同一性障害らしい女性スティーヴンをめぐる小説で、決して猥褻本ではない。

[15] セシル・フィリップ・テイラー（C. P. Taylor, 1929-81）の戯曲『善き人』(*Good*, 2022 初演)では、ナチスに重用れた文学部教授ジョン・ハルダーが大学構内のかがり火にくべて燃やす本の中に、ユダヤ人の母方の血統を持つマルセル・プルーストの『失われた時を求めて』のフランス語原著が含まれている。C. P. Taylor, *Good* (London: Methuen, 2022), p.43.

[16] 乳牛 1 頭の搾乳量は通常 1 日 25～30kg、年間約 8,000kg とされる。500 ガロンは約 2,250kg であるから、飼料等の環境が改善されさえすれば、けっして達成不可能な量ではない。

収奪によって、ライリガンの富の一端が担われている。自然界に対する同じ姿勢を雇用労働者に向けたのが、詐欺行為④の労働者搾取の工場経営である。故郷での暮らしを十分に保証できず、都市部や外国への出稼ぎ労働者となる脱出資金しか与えない雇用システムが、人口流出による過疎化と地方の衰退を招くことは、町会議員たるライリガンは当然分かっているはずだが、彼は賃上げの姿勢を見せていない。むしろ、実の息子マイケル(Michael)に対しても財布の紐はきつく縛られ、マイケルは「司教のためには滝のように金が流れるのに、息子にはたった 10 ポンドさえ親爺はくれないんだ、実の息子だぞ、ダン」(A waterfall of money flowin' for a Bishop, an' him denyin' his son a tiny tenner; his own son, mind you, Dan. [56])と嘆いている。ライリガンの利得は、マラーキー司教歓迎行事のために、いまや惜しみなく使われている。ダニエル曰く、「司教さまのために使っているすべてが、町の噂話の中核だ。親爺さんがやっていることすべてや、家を模様替えするために運び込んでいるものすべてが、これまた、町の人々の耳目の中心で、まるで暗黒の空に打ち上げた、カラーの星の狼煙(のろし)玉みたいなもんだ。」(All he's spendin' on the Bishop's the core in the talk of the town.　All he's doin' and all he's bringin' to diversify the house is the centre, too, of the town's sight an' hearin', like a rocket of coloured stars let loose in a deep dark sky. [55])

(5) 詐欺に支えられたカトリック教会

メイナスが指摘したライリガンたちの 4 つの詐欺——享楽(踊りや酒)提供の抜け道、非文化的消費の固定化、土地や家畜の虐待、労働者の搾取———これらを通して獲得した収益が、やがて里帰りする司教の歓迎行事や過剰な接遇、言い換えれば、カトリック教会の高位聖職者の一時的な安逸のために、浪費・散財される構図が浮き彫りになる。家畜の苦役や労働者の酷使によって生み出された富は、宗教的献金の名目で、カトリック教会に上納され、教会中枢へ構造的に還流していく。こうした社会的・経済的機序は、社会主義や共産主義、あるいは神と個人が直接つながるプロテスタントの考え方を信奉するオケイシーにはとうてい受け入れがたいものだった。

「人々をロザリオの数珠のラオコーン[17]の中に抑えつけ、雁字搦めにする」(... stifle and tangle people within a laocoön of rosary beads [47])というメイナスの非難は、こうした抑圧支配を象徴的に表現している。支配体制に公然と反発する声は他にも見られ、恋愛や婚姻の自由を父親ライリガンやバレン司祭から否定された若いカップルが叫ぶ以下の台詞は、教会至上のヒエラルキーを打ち壊し、個人の自由と平等を訴える革命的な、そして教会権力にとっては不都合で冒涜的な叫びだろう。

キーリン(激しく)司教が自分で自分の馬鈴薯をむけばいい!
ダニエル(激しく)司教が自分で自分のチドリをむしればいい!

Keelin [*vehemently*]. The Bishop can peel his own spuds!
Daniel [*vehemently*]. The Bishop can pluck his own plover! (106)

---

[17] トロイアのアテナイ神殿の神官で、「トロイの木馬」に疑惑を抱いて槍を突き刺し、海の大蛇 2 匹に息子 2 人共々絞め殺された人物。ここではその親子 3 人を彫像で表現した群像のイメージと思われる。

若いカップルの反抗を後押しするように、爺さんもフーローンの口伝えの形式ではあるが、「キリストの高貴な御手が弟子たちの足を洗ったのだから、半ば高貴な司祭の両手がジャガイモの皮をむくのを怖がるべきではない」([He said, Father, that] since the holy hands of Christ washed the feet of His Disciples, the half-holy hands of the Canon shouldn't be afraid to peel a spud. [104])と、聖書の故事を辛辣に引き合いに出して、カトリックの教条的支配に抵抗している。

2. 聖像礼拝への揶揄

カトリックに特徴的な聖像礼拝にもオケイシーは批判の目を向けている。プロテスタントは偶像崇拝を禁じる戒律を「モーセの十戒」の第２に置いているが、カトリックでは十戒のどこにも、偶像崇拝禁止の言葉は見当たらない。『司教のかがり火』のに登場する聖像は、フーローンが信仰する聖カーザビアンカと、マラーキー司教が信仰する聖トレモロの２体であり、いずれも架空の聖人に基づいている。

その外観は、前者が小さな像で「黒い顔で、深紅のローブをまとい、片手に黄金の冠を持っており」(*who has a black face, wears a scarlet robe, and carries a golden crown in one hand.* [51])、後者は「高さ約３フィートの大きなもので、形状は現代彫刻のような形で、いくぶん風変りである。胴体は樽のようで、両脚は短く太く、頭は小さく、全身、ローマ軍団兵士の軍服姿である。聖像の唯一、聖職者らしいしるしは、赤毛を剃髪していることである。ホルンあるいはブッチーナは銀製ないし磨かれた真鍮製で、胴体に巻きつき、楽器の開いた口が右肩にかかっている」(*The statue is a big one, about three feet high, and its form takes the shape of a modern sculpture and somewhat fantastic. The body is barrel-like, the legs are short and fat, the head tiny, and all is dressed in the uniform of a Roman Legionary. The one ecclesiastical sign the figure has is his red-hair tonsure. The horn or buccina is of silver or polished brass, and is coiled round the body, the bell flowing over the right shoulder.* [69])。

ダニエルが伝聞した情報によれば、この聖人は古代ローマの軍隊において楽器ブッチーナ[18](buccina)を吹いた兵士だったとされ、司教が私的な守護聖人として崇めている理由は、「司教さまが考え事をなさる場合は、常にその像を前にする。もし考えが正しければ、バッキニーノはしっかりした音を出し、もし考えが間違っているなら、バッキニーノは震える」(...his statue always fronts him while he's thinkin'. If he's thinkin' right, the buckineeno blows a steady note; if his thinkin's goin' wrong, the buckineeno quavers. [57])からだという。つまり、司教が瞑想する時、正しければ安定した音色、誤っていれば警告めいた振動音を発し、進むべき道を示してくれる魔訶不可思議な聖像というわけである。この管楽器吹奏は司教の瞑想時に限らず、何度かト書きで言及されて、舞台で流れる。とりわけ印象的なのは、プロディカル(Prodical)が

[18] オケイシーはテキストで様々な綴り字や語形を用いており、「バッキニーノ」「ブッキニーノ」等、訳語を対応させたが、すべて同じものを指す。

聖像を取り外して空洞の内部からウィスキー瓶を取り返そうとした刹那に、警告音のように鳴り響く場面である。からくり細工も仕組まれていない、この超常的な怪異現象、あるいは奇跡を舞台で繰り返すことで、世の中には理性で解明できない事象があると、オケイシーは若干、聖像批判を緩和させているように思える。ただし、この吹奏旋律は聞き取れる者を選別する。第２幕の幕切れで「神の長く悲しい溜め息」(a long, sad sigh from God [85])を感得したボウヘロウ神父の耳にも、この不思議な旋律は達しておらず、それゆえ、聖像に帰依するだけで主体的努力を怠る生き方を、彼は以下のように否定している。

ボウヘロウ神父　この部屋には、フーローン、聖人が２人いて、こっちの聖人も（彼は聖トレモロを指さす)、あっちの聖人も（彼は聖カーザビアンカを指さす）口を開いたり、ブッキニーノを吹いたりして、役に立つような言葉を発したり、霊験(しるし)を示したりすることはありませんでした。悩みを抱えている時、フーローン、私たち自身が悩みを解決する聖人なのです。それが、私たちの弱点--そして私たちの強みでもあるのです。

Father Boheroe. Here in the room, Foorawn, you have two saints, and neither the one here [*he indicates St. Tremolo*], nor that one there [*he indicates St. Casabianca*], opened a gob, or blew the Bookineeno, to say a word, or give a sign of help.　When we have problems, Foorawn, ourselves are the saints to solve them.　Our weakness —— and our strength. (118)

我々自身が聖人のような独立不羈の精神を一人一人持つべきだ、とボウヘロウ神父は主張している。これは「万人祭司」的な発想で、むしろオケイシーが立脚するプロテスタントの信仰に近く、平等を理念とする共産主義の考え方にも通じるだろう[19]。

3. 階級とジェンダーの問題

オケイシーの批判の目は、カトリック教会の抑圧や聖像崇拝にとどまらず、社会階級対立やジェンダー不平等の問題にも及ぶ。『司教のかがり火』は、聖職者（司祭 2 人）、中産階級一家（町議ライリガンと娘２人・息子１人）、労働者階級（石工２人、雑用係１人、経理アルバイト１人、鉄道赤帽１人）、その他（年金生活老人１人）に代表される、様々な社会階層の登場人物を配している。聖職者 2 人もモンスィニョールに昇格するバレン司祭と彼に仕える助任司祭のボウヘロウ神父とでは大きな隔たりがある。労働者仲間でも、熟練技能を要する石工（プロディカル、ランキン）と資材運搬などの力仕事を行なう肉体労働者（ダニエル）とは意識的に分業がなされている。

ライリガン（憤然と）足場から飛び降りて、自分で持ってこい！
ランキン　石工ってえのは、材料を持って来させるものなんです。
プロディカル　そいつは人夫の仕事でして。

---

[19] アイルランド語で「ボウヘロウ」 ‘boheroe’は「赤い道」を意味し、オケイシーの戯曲では、例えば反ファシズム劇『星が赤くなる』(*The Star Turns Red*, 1940)のように、「赤」は共産主義を象徴することが多い。

Reiligan. [*Furiously*] Hop off the platform an' get them yourselves!
Rankin.　Masons is supposed to have the things brought to them.
Prodical. That's a labourer's job. (9)

さらにダニエルは、自分は「料理人の助手なんぞでない」(no cock's mate [103])し、「バリウーナの鍋洗いのままでいるつもりはない」(I'm not goin' to stay as a pot-walloper in Ballyoonagh. [88])と、料理人たちへの優越感を誇示している。階級格差は、それぞれの階級内部でも細分化されて存在し、人々の鷹揚な仲間意識を阻却していることが窺える。

ジェンダーの観点から見ると、女性登場人物はフーローンとキーリンの 2 人だけである。長女フーローンは公式誓願を立て、近々修道院生活に入る予定で、メイナスとの世俗の愛を懸命に拒み、それが仇となってメイナスの凶弾に倒れる。恋人をかばうために自殺を装う遺書を咄嗟に走り書きする健気な姿は、すでに慈愛の聖女の高みすら感じさせる。自由な恋愛が許されず、社会での労働も是認されないアイルランドの田舎町の女性にとって、神への献身的奉仕こそは、崇敬される営為の一つであった。

一方、次女キーリンは、姉同様に修道院教育を受けたものの、家事を中心とする主婦業への専念を父親や世間から期待されて育つ。姉よりは奔放な性格で、中年男ランキンをからかって大胆な誘惑をしかけて、彼から唾を吐きかけられもするが、意中の若者ダニエルに対しては無私で真摯な愛情を注ぐ。しかし、キーリンもまた、カトリックの倫理規範や階級意識にとらわれていることを以下のように率直に告白する。

キーリン　ああ、ダン、分からない、私、分からない。私たちの愛を邪魔する敵が大勢いるのよ。
ダニエル（戸惑って）敵が大勢？　何の話をしているんだ？　君の父さんだけだろ。
キーリン（聖像を指さして）ここにもいるし。司祭もいるわ。あなたのことを羨ましがるあなた自身の階級の人全員、それに私自身の陰険な高慢さが、格下の男と結婚するなって、私を脅しているの。（中略）だって、よちよち歩きの頃からたたきこまれたのよ。あの子たちと遊んじゃだめよ、あなたに相応しくないから、って。それから修道女たちにも、私はレディだからレディらしくない振舞いをしてはいけない、って教えられた。一遍にその気持ちを捨て去ることはできないわ。

Keelin. Oh, Dan, I don't know, I don't know; our love has many enemies.
Daniel [*puzzled*]. Enemies?　What are you talking about?　There's only your Da.
Keelin [*indicating the statue*]. There's this; there's the Canon; there's all of your own class who are envious of you; and there's my own dark pride warning me against marrying beneath me. .... You know it was dinned into me since I was a toddler. You mustn't play with those children, dear; they aren't fit for you.　Then by the nuns, telling me I was a lady, and mustn't do anything unladylike.　I can't get rid of the feelin' at the first go. (76-77)

陋習的なジェンダー観が支配する田舎町で、フーローンは殉教者のような自己犠牲の死を遂げ、キーリンは自身の特権的階級意識と抗いつつ、将来的にダニエルと駆落ちしてでも自己解放を目指す可能性を残している。

4. オケイシーの劇作術の特徴

最後に、オケイシーの劇作技法を確認しておこう。『司教のかがり火』は、地元出身者が司教に栄達して故郷に錦を飾る前日の模様を描き、司教が深夜、ついにお国入りしたらしい場面で閉じている。しかし、肝心なマラーキー司教の人柄や特徴はほとんど言及されず、実像が不明なまま、幕は閉じる。『司教のかがり火』初演の 1955 年に先立つ 1952 年、サミュエル・ベケット(Samuel Beckett, 1909-86)の『ゴドーを待ちながら』(*En attendant Godot*)が初演され、表題の主人公がついに不在のまま終幕を迎える形式の先鞭はつけられていたとはいえ、司教のお出ましを心待ちにしていた観客は、そのまま幕が下り、いささか物足りぬ思いを味わったことだろう。

登場人物の不在に関して付言すれば、ライリガン夫人への言及がまったくないことも不自然に感じられる。離婚が認められないカトリック信徒であるから、死別が強く推測されるが、亡き妻へのライリガンからの、あるいは亡き母親へのフーローンやキーリン、マイケルからの言及も、奇妙なことに、一切ない。せめて、ライリガンが塀に植えたがる「蔓(つる)バラ[20]」(climbin' roses [10])が、実は亡き妻が愛した花だったとか、子供たちが母親の形見や思い出を大事に持ち続けているとか、とりわけフーローンの誓願と母の死に関りがあるのか、少しでも触れてあれば、作品に厚みが増したように思われる。

時・場所・筋の 3 つの統一が図られた演劇をアリストテレスは理想とした。まる 1 日以内に、ほぼ同一の場所（屋敷の庭と居間内部）において、単独のプロットで進行する『司教のかがり火』は、古代ギリシャ演劇に遡るこの伝統的な作劇術に忠実に依拠した建付けになっている。３幕の舞台劇はこれら３つの統一を守って完結し、幕切れに続く幻の第 4 幕は、劇場を後にする観客一人ひとりの脳裏で繰り広げられる。

例えば、帰郷翌日の司教の初仕事は、フーローンの悲痛な葬儀となり、自死と見なされた場合は、きわめて簡素な葬送だろう。司教叙任の盛大な祝賀歓迎行事は中止あるいは縮小され、自殺者の血なまぐさい住居に司教が滞在することは考えにくい。メイナスは盗んだ金で身を持ち崩して、悔悟の余生を送るのかもしれない。あるいは、こじ開けた引き出しの現金消失から強盗殺人事件として警察の捜査が始まり、重要容疑者として手配・逮捕され、厳しく追及される余地も残っている。遺書と思しきメモとともにフーローンの遺体を発見する家族の悲嘆は計り知れない。事実誤認に基づくとはいえ、フーローンの苦しい胸中を察してやれなかった後悔で、父親ライリガンも妹キーリンも苦しむだろうし、とりわけ管理を怠った自分のピストルが悲劇を招いた責任を長男マイケルは痛感し、癒しがたい自責の念に駆られるだろう。装備品の不祥事に対する、英軍当局からの処分も、当然ながら避けがたい。こうした暗雲に満ちた展開が予想される第 4 幕をオケイシーはすべて、観客や読者の想像力に委ねる。

---

[20] バレン司祭は「頷(うなず)きバラ」(nodding roses [10])と言い換えている。

職人たちのがさつな搬入によって、貴重で高価な家具類が損傷していく様子は、『紫塵』でもユーモラスに描かれていた。それに加えて、『司教のかがり火』では、石工同士のレンガの取り合いの子供じみた口論や、転倒してセメント袋を高級絨毯にぶちまける爺さんの失態など、幕開けから笑劇に近い喜劇として展開し、幕切れ近くになって突然、深刻な惨劇に見舞われる。

しかしながら、これは、オケイシーの常套的な作劇術であることを思い起こす必要がある。初期のダブリン３部作においては、連行された無実のミニー・ポウエルが射殺される『狙撃兵の影』(*The Shadow of a Gunman*, 1923)、IRA に粛清されジョニー・ボイルの遺体が発見される『ジュノーと孔雀』(*Juno and the Paycock*, 1924)、隣人ノラを庇うベスィ・バージェスが英軍による誤射の犠牲となる『犂と星』(*The Plough and the Stars*, 1926)、これらはいずれも終幕近くになって登場人物が突然の死を遂げている。英国移住以降の後期作品においても、労働ストの青年指導者アヤモン・ブレイドンが警察から狙撃される『僕のための赤いバラ』(*Red Roses for Me*, 1943)、逆上したドミニア神父がトラック運転手ジャックを素手で殴り殺す『コケコッ好男(コーダン)』にも土壇場で悲劇へ急展開する技法は受け継がれている。

おわりに

初期のダブリン３部作に比べると、オケイシーの後期作品はあまり考察の対象とされていない。劇作家の没後 60 年を迎える 2024 年以降、オケイシーの総合的な再評価の機運が高まることを期待し、本稿がその一助になれば幸いである。